2003.12.27.

おーい図書館 No.89
発行 おーい図書館
代表 青木和子
TEL. 048-311-0886
松戸市牧の原1-104-416

投稿

「戒厳令と有事法制を考える
―関東大震災80周年記念集会」に参加して

吉原 里絵

今回の催しは、9月定例会でお話する神惇子さんが関わる「中国山地教育を支援する会」の主催だった。（9月14日亀戸駅前カメリアホール）以前、神さんが中国で人々と交流をされていると、少し聞いたことがあったのと、定例会に出席できないこともあり、参加した。

映像・劇・詩の朗読・講演による。関東大震災後に起きた亀戸大島町での中国人労働者虐殺事件と活動家王希天殺害事件の検証と「中国山地教育を支援する会」の活動の歴史は、非常に興味深いものであった。

強く感じた事は、凶気の土壌は日々培われているのであり、現在の私達の生活の中からも、現れるかもしれないということ。集団殺人を犯した日本人の凶気と地震という天災には因果関係はない。平時の逆恨みに近い差別と排除の意識があり、戒厳令という「通り魔」が防犯責任者になる」ような凶気の勅令によって行われた。現在の他者への差別意識はどんなものなのか、強引に決められた有事法制が如何なる事態を引きおこそうとしているのか、私自身、じっくり考えたい。

もう一つ強く感じた事は、この一連の事件に巻き込まれた人々、地道に真相解明した研究者、「支援する会」の活動など、大震災から80年という歴史の重みについてである。虐殺を免れた人の証言、政府内部資料、支援が成り立つまでの経緯など、それぞれ並列できないほど生々しい過程があると思われる。多くの人々が連なって私の元へ届く「無事」な状況、積極的に維持する努力が必要である。

消費するための情報ばかりに浸かっている毎日、道を踏み外さないための知恵を得る機会を作らなくては、と、考える。

・参考文献

・季刊中帰連」第26号 2003年
中国帰還者連絡会
・関東大震災中国人大虐殺」1991年
岩波ブックレットNo.217 二木ふみ子著

「中国山地教育支援」報告を聞いて

伊藤 和子

9月定例会で神惇子さんのお話を聞き、大きなショックを受けました。

関東大震災時の朝鮮人虐殺については、向島で被災した亡母の話題にも度々上ったし、大逆事件その他で一般によく知らされている程度には知っているつもりでしたが。江東区大島に当時中国人の居住区があって、朝鮮人虐殺の翌日、その人達も騙されて連行され、集団でむごい殺され方をした等という話は、今迄聞いた事が無かったので非常に驚きました。

私の周りには中国情勢に詳しい人達が大勢いらしたのに、「何故？どうして？」と、とっくに鬼籍に入られた方々を揺り動かしたい気持でした。

きっと、どなたも御存知なかったのでしょう？それ程徹底的に黙殺され、歴史の暗部に閉じ込められた事件を、よくもまあ半世紀以上も経ってその事実を掘り起こし突き止めた、二木さんという一人の女性の執念と行動力！「是非この事を公表し、贖罪をしなければ。」という責任感の強さに脱帽しました。またこの運動に協力を惜しまない神さん達の地道な活動ぶりにも。

実は発見者の二木さん達は、犠牲になった中国人達の出身地である福建省温州の地を探し出すと共に、日本軍の三光作戦で壊滅させられた旧満州の興隆県の存在も知って、支援を拡大中との事。この度の例会は、5回目の今夏も「興隆の旅」へ参加された神さんの報告会でした。

私は、7～8年前に観光で訪れた万里の長城を想い出し、そこから眺めた深い森の麓にその村はあったのだ、あんな静かな森の中へも日本軍は攻め込んで暴虐無道の限りを尽くし、千里の無人区を造ったのだと、そのおぞましさに震えました。今またアメリカは、イラクの地に劣化ウラン弾をバラまき、石油のみを残して無人の地にしようとしています。

失敗の歴史に学ぼうとしない傲慢なアメリカ・何時か来た道へ戻ろうとしている日本。日々、狂気を感じる此の頃です。

東京新聞のコラム「筆洗」より

図書館。そう聞くと読書や勉強の印象が強いが、アメリカでは伝統的にビジネス発想の孵化器なのだそうだ。ゼロックスも、かつての国際航空会社の草分けパンアメリカン航空も図書館で誕生したという。

アメリカの図書館を実地に調べてきた経済産業研究所・菅谷明子さんの近著「未来をつくる図書館」（岩波新書）に教えてもらった知識で、ゼロックスの発明者は特許文献の複写の写し違いに悩んでいた弁護士だった。図書館に通うち、光で電気伝道を変える物理学の論文を見つけ、世界初の電子複写機に育てた。

パンアメリカンの創設者は、図書館の地図部でハワイとグアムの間に小さな島があるのを見つける。島は給油地となって太平洋路線開設につながった。郊外に住む三児の母、ベティ・フリーダンさんは図書館の資料を使い、有名なフェミニズムの本「新しい女性の創造」を書いた。

主役は図書館でなく、もちろん人間であるが、図書館の持つ公の情報をみんなで使おうという強い姿勢がうかがえる。今では小説を書かせるため作家に小部屋を提供する図書館まであるそうだ。旧ソ連スパイ達が図書館愛好者だったのは使いやすさの証明でもある。

今、ネットの時代になり、パソコンがあれば自宅でも情報は引き出せる。それでも、本の情報はなお膨大だから、大きな図書館では学生や研究者らが本のコピーのための行列をつくっている。

先進国の中で、日本の図書館利用率は中ぐらいだそうだ。ただし図書館が情報基地であるという側面は欧米にもっと見習いたいところだ。

要望書を提出

事務局

小中学校選択制・統廃合など実に重要な施策が盛り込まれた、松戸市生涯学習基本計画・教育改革アクションプラン・小中学校教育資源有効活用（適正規模適正配置）実施計画の三「案」は2003年9月22日市議会議員全員協議会で発表され、その後市民の同意を得ることもなく、来年度から順次実施として10月25日に公表されました。

今、小中学校の現場では、市の強引なやり方に承服できない保護者や先生方が、子どもたちのためにと立ち上がっています。

私たちも10月4日には、教育長教育委員長宛に、12月9日には市長宛に、要望書を提出しました。

松戸市長　川井敏久様

今秋、松戸市生涯学習基本計画が発表されました。また、今年度より、松戸市長期総合計画の第二次実施計画がスタートしています。しかし、そのどちらにも、生涯学習の中心というべき図書館についての視点が、不足していると思います。第一次実施計画における、「新しい中央図書館の『建設着手』」の文言が、『構想研究』となったのは、計画の後退に他なりません。

松戸市、46万市民のための図書館本館が、今のままで良いはずはありません。近隣の図書館と比べても、非常に見劣りしています。現在の厳しい社会情況の中で、市民のニーズに応えるような視点で、様々な情報を提供できる図書館は、これからの町づくりのために、必要不可欠な存在です。情報の発信基地として、またこれからの松戸市を背負って立つ子どもたちをはじめ、すべての市民、特に高齢者や障害者に配慮した図書館が、必要です。

真の意味の「生涯学習」における図書館の重要性を認識し、建設計画の実現に向けて、ご尽力下さいますよう、下記の通り、要望致します。

記

1. 松戸市が提唱している「行政と市民のパートナーシップ」に則り、計画の初期段階から、市民参加の（仮称）建設準備委員会を設置して下さい。

1. 長期的な取組と並行して、「今すぐにでも実現可能なこと」として、各分館間での蔵書の交換を、実施して下さい。

2003年12月9日

おーい図書館

代表　青木和子